



I-OWA マンスリー・セミナー

フリー・ディスカッション: 老荘、知足、幸福度について

伊藤 宏一、岡本 和久、他

岡本|私の著書、「老荘に学ぶリラックス投資術」を、東京外国語大学大学院にいたアレクサ・カウイングさんが翻訳してくれました。今日はアレクサさんにもお出でいただいているので、まず少し、翻訳する時は、どんなところが難しかったなど聞いてみたいと思います。

カウイング|金融と老荘思想の両方のテーマがある為、背景となる知識は少しはありましたが、勉強しなければいけない部分がありました。翻訳する時は、自分が意味を理解していないと上手く伝わらないですね。投資の話も中国の哲学の話も、一般の人には難しいというイメージがあります。岡本先生が、すごくわかりやすく書いていましたので、英語でも同じようにわかりやすく書くことを注意しました。非常に苦労しましたが、周囲の感想もよかったです。

岡本|アレクサさんを指導されていた鶴田先生、感想はいかがですか？

鶴田|アレクサさんが大変努力して素晴らしいものに仕上がったと思います。私は普段、通訳者として、また教える立場として、常々思うことは、結局、「何を伝えようと思っているか」ということが、伝わるのが大事だということです。やはり理解していないと本質がわからない。本質を捉えるということの大切さですね。通訳もそうですが、言葉に囚われてしまうと、決してそこに到達することができません。岡本先生の講演の中にありましたが、中国のカリスマ・シェフ、包丁(ほうてい)が牛を裁く妙技は、牛という外見に囚われずに、牛が骨と筋に見えるからこそのできるのでしょう。そして、それが全て自然体で出来るのが「心の技」だということです。そのためには、本質を捉えることが必要です。更に素晴らしいことは、それが自然体で出来ること。極めることで、その境地に到達できればと思います。

岡本|それはどんなことにも通じることでしょうか。今日はインドからもサンジープ・スィンハさんがお出でになっています。何か質問はありますか？

スィンハ|文化と価値観と哲学の関係は、どのように考えればいいのでしょうか？



伊藤|人間の暮らしと、自然環境の違いで文化の違いが生まれます。日本で考えると、北と南に分かれます。北の気候が厳しい青森のような所でも、縄文時代の人たちは狩猟採集生活しながら定住していました。自然は人間に優しく、非常に豊かな環境の中、魚と木の実が豊富なので、狩りをして獲物を追いかけることはなかった。そして、そのような自然と人間の関係から日本的な文化というものが出来てきます。価値観は文化をベースにするけれど、その人の生き方や、家族の価値観にも影響されますよね。また、「他の国で生活した経験があるのか？」ということも影響をします。哲学は、それらを徹底的に考え抜いて、一つのシステムにするのです。文化がベースとなって、そこに、ある程度、哲学や価値観が反映されて個人としての哲学が構成されています。ですから、人によって哲学のあり方は皆違う。中国でも、北の自然環境が厳しい所は、厳しい戒律的な儒教が中心であり、南のような自然環境の豊かな所は、ゆったりとした、論理的というよりは直観的な考え方が支配的というような違いがあります。日本人はあまり論理的ではないので、日本に哲学はなしと言われています。しかし、岡本さんの言われた「アート・オブ・ライフ」というようなレベルでは、いろいろなことを直観的に感じたものが出てきました。それが、例えば禅、禅宗であったりしたわけです。これらは哲学とは異なったものですが、一つの世界観や価値観になりますよね。

岡本|アメリカでは、今、金融の問題がいろいろ起こっています。その改善策は、一番はルールの強化であり、2番目に出てくるのが倫理ですね。一方、日本的なアプローチでは、強欲であることを止めて、「知足」の心を持ちましょうというようなところへ議論が落ち着く。倫理と知足とどう違うのかというと、知足は一人一人の心の在り方であって漠然としている。倫理の場合は、その後ろ側にルールみたいなものを作ってしまえばいいというような気がして、その辺は違う様に感じますね。日本やアジアは、自然と共生している中で、再生可能エネルギーとい



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

う話が出てくるのでしょうか。そういう意味では、伊藤さんの話と私の話は一連の流れでつながっているといえます。クラウド・ファンディングのように、「みんなでお金を出し合ってやろう！」というのは、農業的な発想なのかもしれません。

鶴田| 何をもって知足なのかというところは、岡本先生の講演の最後におっしゃった「しあわせ持ちになること」という言葉に尽きると思います。幸せになるという言葉は漠然としていますが、自分だけではなく、社会もそうだし、ひいて言えば、世界に対してどのような形で貢献できれば自分が幸せと感ずることができるとか、そこに至るまでの考え方が様々ですね。

岡本| 結局、しあわせ感とはどういうものかという、究極的には「利他」の感情だという気がします。やはり、他人に喜ばれるということが、ある意味、究極の幸福感だと感ずます。

伊藤| 僕は最近、「ハピネス」の上に「ウェルビーイング」があると考えています。良い暮らしというのは、主観的な面と客観的な面がある。例えば「きれいな水が飲める」とか、「適当な温度で暑すぎない」というウェルビーイングについても、その客観的な面を認識しないと、「環境が悪くなくても私だけ幸せならいい」というような話になってしまう。主観的な面でのハピネスは、ウェルビーイングの一部だと客観的に捉えないといけないと思っています。自然エネルギーもそうですが、外に目を向けるのは重要です。

岡本| 主観に埋没していないで、いつも外から自分を見る、客観的な目が必要だということでしょうね。

伊藤| もう一つ、ハピネスのことを言うと、日本は幸福度の指標で、OECD の中でも高い方にありますが、一つだけ異常に下の方にあるものがあります。それは女性の生き方、社会進出ですね。だから、すごくバランスがとれていません。1994 年を境にして、共働き家庭の数が、片働きの世帯を上回っています。今、一千万世帯位あると思います。「2 人でやりたい」という場合と、「2 人でないとやっていけない」という両方がありますが、そこで生活設計上、問題になるのが出産です。女性が仕事について、これから大きな役割を担うという時に、出産という問題が出てきます。先に生むのか、後で生むのかという選択肢がありますが、もし後を選択してずるずるいくと、40 歳位になってしまう。そうすると、流産率がかなり高いですね。よくワーク・ライフ・バランスと言いますが、あれば「ワークの方から見てライフとバランスをとりあえずとろうね」という感じなので、「出産は、仕事をまず考えてから」となりがちです。夫婦でそのバランスをどうやってとるのか、すごく大きな問題であり、それは企業や社会の在り方にもつながってきます。都市部ですと、子育ての社会的な装置が弱い。それも問題ですね。出産、子育てが遅れると、長い老後に医療等いろいろ問題が出てくる。出産ということをしっかり生活設計しないと、全部後ろに行ってしまう。よく全体のライフプランを考えて、いつどういう風にリスクをできるだけ取らないで子供を産むのか、仕事をするのか、かなり緻密に考えないと



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

いけない所に日本は来ていますね。

岡本| 今までの日本は、日本人が集まって、しかも男と女で違う世界に住んでいた。男社会がいいか悪いかという問題ではなく、違った世界に住んでいた。日本の男は会社に勤め、多様性のない曖昧模糊たるものが許容されている環境に住んでいた。日本が、アメリカのように、外国人や女性がどんどん入ってきて職場に就く。そういう多様性へと変わってきた時に、今まで曖昧として、なんとなくみんなで「そうだよな」と分かりあってきた部分がどんどん崩れ、全部、細かく法律で規制していかなければならなくなっている。必然的な傾向なのだと思いますが、なにか少し淋しい感じがしますよね。日本的なものが失われていくのかなと。曖昧とした知足というよりも、「税率をどうするか？」という話の方にいきそうな気がします。多様性というものが押し寄せてくる中で、日本人全体がどのように価値観を形成していくのか、非常に難しいと思います。

伊藤| 戦争中は、国家中心の集団主義、戦後は企業依存の集団主義で、この企業依存の集団主義がはっきり崩れたのが、1989年だと思います。そこから20年間リストラ等いろいろなことがあり、企業は個人の面倒を一生見てくれないということが嫌というほどわかった。一方で「自立」ということで、バラバラになりましたよね。バラバラになって社会環境の安定が崩れ孤独になると、デュルケームの自殺論ではないですが、自殺する人の割合が増え、年3万人が自殺した。それでは何をよりどころに、日本に価値観を再構築していくかということ、基本は、個人主義しかないですね。個人で考えて、その上でどうやって協調を図っていくのか。過去の地域の文化的遺産にべたっと張り付くのではなく、過去の遺産は我々の貴重な資本として、活用できるものを生かしていくべきでしょう。「集団の中に埋没するのはやってられない！」という思いが、日本の中にもあります。やはり個人個人を尊重して、個人主義だけど、横にもつながるというのが今でいうソーシャルです。横につながらないと人間生きていけない。その張り方について昔あった資源は、活かすに足りるものですよね。アメリカのソーシャル・キャピタルの概念は、社会環境を構築してくるものは、一つの資本であり、それが強い地域とそうでない地域では、文化程度も環境も違って来る。日本でも同じことが言え、社会関係資本、ソーシャル資本のベースに文化というものがあり、それを再発見する過程が今かなと思います。

岡本| インベストラ이프 8月15日号でフランソワ・カントンさんのコメントの中で、今、ユーロが抱えている一番の問題は、イタリアとかスペインの地域の人々の職がないことだと。技術がある人は、ドイツへ単身赴任で行く。あまり技術がない単純労働の人は、モロッコやアンゴラへ出稼ぎに行く。月給も安く、生活費も安いのでそこで働き、家族に仕送りをする。家族は、例えば、コストの安いスペインの北へ移住させる。要するに、ユーロの南の方は家庭が崩壊し始めているというわけです。経済的なユーロの問題はたくさんありますが、社会的なものを、これからユーロを考えていく上でものすごく大きな問題になるのではないかと断言しています。確かに、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

家族というミクロ的なソーシャル・キャピタルというものの価値も考えるべきでしょう。日本では、家族を曖昧とした表現で絆という形になるのかもしれませんが。一方では、パソコンを通じてでしか、コミュニケーションがとれないような状態にもなっています。これからどんな状態になるのかわからないですけどね。今日はありがとうございました。